

令和8年度 第3回学校運営協議会議事録

静岡北特別支援学校 南の丘分校

1 日 時 令和8年9月16日(水)14:30~16:30

2 会 場 駿河総合高等学校 管理棟1階 会議室

3 参加者 駿河総合高等学校：校長、副校長、教頭、総務課長、教務図書課長、生徒指導課長、
進路課長、教育相談、学校魅力推進課長、情報管理課長、研修課長
静岡北特別支援学校南の丘分校：校長、事務長、副校長、部主事、進路指導主事、教務主任
学校運営協議会委員

駿河総合高等学校	会長 静岡大学教育学部教職支援室特任教授
	NPO 法人ゆたかの木理事長
	富士見学区自治連合会 会長
	静岡新聞社・SBS 静岡放送取締役
	弁護士
	駿河総合高等学校 PTA 副会長
南の丘分校	常葉大学教育学部 講師 南の丘分校令和8年度コーディネーター
	法律事務所 弁護士
	独立行政法人高齢・生涯・求職者雇用支援機構静岡支部 静岡職業能力開発促進センター所長
	静岡市駿河区役所 地域総務課地域防災係 係長
	静岡北特別支援学校南の丘分校 PTA 会長
	静岡地区協力雇用主会 事務局長 静岡市駿河区保護司会 理事

※うち、3名欠席

4 内 容 全体進行：駿河総合高等学校 会長

(1)開会（駿河総合高等学校 会長）

(2)両校校長あいさつ（学校紹介を含む）

＜駿河総合高等学校校長＞

学校の広報・体験入学の報告:

7月に実施した「1日体験入学」には、1,000名を超える中学生および保護者が参加した。

8月にグラウンシップで開催された「静岡市内公立高校合同説明会」では個別相談の列が途切れず、本校に対する関心の高さを実感した。

10月には授業や部活動の様子を公開するオープンスクールを実施予定である。

夏休み中の生徒の活躍:

陸上部（3年生徒）：陸上100m・200mの東海大会で1位となり、インターハイ（全国大会）出場を果たした。帰校後の報告で「東海大会では自分の前を走る人がいなかったが、全国大会の予選ではすでに前に人がいて、全国のレベルの圧倒的な高さを痛感した。」と素直な悔しさを語ってくれた。この経験は彼女の将来の大きな糧になると確信している。

海外短期留学

2 年生徒 A：オーストラリア・パースにて「スポーツ障害における怪我の予防」をテーマに調査。

2 年生徒 B：オーストラリア・ケアンズにて「多文化共生」をテーマに現場調査。

両名とも事前計画通りに進まない難しさを経験しながらも、たくましく調査をやり遂げ、将来の展望を感じさせる報告を行ってくれた。

地域防災活動: 夏休み期間中、市内で防災に関するフィールドワークに取り組んだ。

<静岡北特別支援学校南の丘分校校長>

本校および南の丘分校の状況:

本校（静岡北特別支援学校）は葵区漆山（こども病院の近く）に位置し、知的障害のある生徒が通学している。南の丘分校は今年 4 月で開校 23 年目を迎えた。高校の敷地内への分校設置は県内初であり、全国的にも非常に珍しい先進的な取り組みである。

静岡県が目指す「共生・共育」の理念:

一般的な「障害者教育と普通教育の並列」ではなく、「同じ場所で生活し、共に学ぶ」双方向の共生を目指している。支援が一方（助ける側・助けられる側）になるのではなく、互いに支え合い成長していく関係性を重視している。

両校生徒の関わり（マラソン大会のエピソード）:

1 月・2 月に実施されたマラソン大会にて、走り終えて休憩していた駿河総合高等学校の女子生徒数名が、必死の様相で走ってくる南の丘分校の男子生徒に対し、「頑張れ！」と一生懸命に声をかけていた姿を紹介。同じ長距離走の苦しさを直前に体験・共有したからこそ、自然と生まれた応援であったと分析。卒業式では分校生に対し、「将来、社会に出て同じ職場等で再会した際には、同じ校舎で学んだ同窓生として当時の思い出をぜひ語り合ってほしい」とメッセージを送ったことを明かした。

(3)授業参観及び校内見学（駿河総合 6 限 南の丘校内見学）

駿河総合高等学校は、6 時間目 3 年生選択授業を中心に参観していただいた。福祉実習室、視聴覚室、CG 室、ものづくり実習室、生徒ホールなどの施設も併せて見学した。南の丘分校は、帰りの SHR の様子、放課後行われる体育館でのサッカー部、バスケットボール部の部活動の様子を見学した。

(4)協議「持続可能な共生共育に向けて」 進行：南の丘分校 令和 8 年度コーディネーター

ア「共生・共育」について

インクルーシブ教育の 4 つの概念 Exclusion（排除）、Segregation（分離）、Integration（統合）、Inclusion（包摂）を資料で確認した。日本の現状はまだ「Integration」にとどまっている部分が多いのではないかと提起。2022 年の国連勧告において、日本の分離的な教育環境や、形骸化した交流学习、人権的配慮の不足が指摘されたことに言及。単に同じ場所にいるだけでなく、意図を持った体験として真のインクルーシブへ深めていく必要性を指摘した。

イ 合同防災避難訓練の報告と検証

(ア)駿河総合高等学校側の報告（駿河総合 教頭）

6 月 12 日実施（地震・津波想定訓練）：生徒へ事前に実施日時を告知せず、実際の災害に近い臨機応変な判断力を試す形式で実施。1 次避難（机の下等）→ 津波警報発令に伴う 4 階以上への「垂直避難」→ 高層階でのクラス別点検 → 体育館での地区別再集合 → スマホアプリ「C ラーニング」を用いた安否確認という 3 段階のフローを検証した。

11 月実施予定（火災想定訓練）：5 階教科教室からの出火を想定し、初期消火、通報、避難器具の確

認、安全な避難経路の確保を重点項目として計画。

(イ)南の丘分校側の報告(南の丘 部主事)

駿河総合高等学校と合同での垂直避難訓練を初めて実施した。熊本のイオンでの事故を受けて、避難前に校舎自体が安全であるかを確認するプロセスが必要であると分析。放送設備が使えない場合を想定し、大声での伝達や伝言形式などアナログな情報伝達ルートの準備も必要。知的障害のある生徒に対しては、「～した方がいいかもしれない」という曖昧な表現ではなく、「～しなさい」という直感的かつ明確な指示が必要不可欠である。4階等へ避難させた後、全員を2階体育館へ移動させる運用にはリスクが伴うため、今後の検証が必要である。

(ウ)委員からの質疑・助言

- ・訓練で失敗や課題が出ることは検証として非常に有益である。
- ・生徒側には「今回の手順は試行的なものである」ことを事前に伝えておくことと混乱が少ない。
- ・熊本の件はまだはっきりしていないが、プロパンガスによるものではないかと言われている。

ウ 県内の高等学校と特別支援学校分校の共生・共育の実例

(ア)総合学科高等学校の実例：駿河総合高等学校×静岡北特別支援学校南の丘分校(駿河総合 教頭)

・交流の3つの柱:

1. 行事交流: 対面式、交通安全教室、防災訓練、地区別集会、体育祭、マラソン大会など。
2. 部活動交流: 1年生を中心に、ポッチャやレクリエーション活動を通じて直接的な交流を実施。
3. 授業交流: 従来の家庭科・総合探究・体育に加え、今年度は「工業技術基礎」など専門・実技科目へ領域を拡大予定。

・商業科×印刷班の授業実践(駿河総合 教諭)

駿河総合商業科で過去に作成したオリジナルキャラクターと、南の丘分校印刷班のキャラクター(ミナミン)を組み合わせてオリジナルメモ帳を共同制作した。駿河総合の生徒がグループごとに南の丘分校の作業場を訪問。分校生の案内で校内の写真撮影を行い、その素材をAIで加工してデザインを作成した。完成したサンプルを分校生に見せ、「もっとこう改善してほしい。」というフィードバックを受け取り、改訂作業を行った。今後は、商業科が持つ「広告・販売促進」のノウハウを生かし、分校生が作った商品をより顧客にアピールするためのマーケティング連携を検討している。

・現場教職員の手応え

(南の丘 教諭) 着任して5年目になるが、年々交流の質・量ともに充実していると実感している。双方の教員が互いの職員室を行き来して事前打ち合わせを行う姿が日常化している。2学期以降、理科や国語などの教科においても共同授業の提案が出されている。

(南の丘 部主事) 分校生は少数派になるため最初は委縮しているが、目的を明確に設定し、回数を重ねることで主体的に発言できるようになる。

・かまどベンチ制作(駿河総合 副校長)

総合的な探究の時間(防災)で生徒の発案から始まった「かまどベンチ」制作において、南の丘分校生や外部機関と協働して完成させた事例を紹介し、併設校ならではの協働成果を示した。

(イ)専門学科高校の共生・共育の実例：田方農業高校×沼津特別支援学校伊豆田方分校(南の丘 副校長)

- ・作業学習(農園班・陶芸班等)や専門学科(動物科学・食品科学)での共同授業を実施。
- ・ライフデザイン科セラピーコースと分校生が協働し、近隣駅前のプランターに花を植えるプロジェクトを実施。互いに教え合い、コミュニケーション力が高まった。

(ウ)普通科高校の共生・共育の実例：富士東高校×富士特別支援学校富士東分校(駿河総合 副校長)

- ・縦割りランチ交流(日常的な会食交流)、部活動交流、PTA奉仕作業や校内清掃時のペットボトル回収・分別活動を通じた取り組みを報告した。

エ 協議・委員からの発言および意見交換

(ア)交流及び共同学習の質的向上と道德教育（南の丘分校 令和8年度コーディネーター）

- ・単に「同じ空間に集まる」だけのイベントで終わらず、事前学習・目標の設定・振り返りを伴う「授業」としての成立が不可欠である。
- ・レクリエーション時に最初「行きたくない。」と嫌がっていた分校生が、参加後に「楽しかった、楽しかった。」と笑顔で帰ってきたエピソードを紹介し、越境する機会の大切さを語った。
- ・道德の教科書や論文を分析した際、障害者理解が「思いやり（感情論）」に偏重している傾向がある。「思いやり」と「合理的配慮」は明確に区別されるべきであり、障害理解の根底には「人権の尊重」が存在しなければならない。感情論ではなくフラットな関係性に基づいた理解を教育現場で成熟させていくべきである。

(イ)各委員より

- ・2002年の伊東城ヶ崎高校（伊東城高分校）、2008年の南の丘分校の設置初期、さらには池新田分校の設置時には、地域住民や保護者、高校側からの強い反対や困惑・抵抗が存在した。当初、県の財政・方針としては「県内5校まで」と制限されていたが、支援を要する生徒の増加に伴い、現在では県内13校にまで拡大した。20年を経て「インクルーシブ」という言葉が共通言語となり、両校の掲示物や写真、双方の生徒・教員・PTAの良好な関係性が見られるようになった現状を深く感銘を受けつつ高く評価した。
- ・会社が近隣にあり、今回初めて協議会に参加した。「共生・共育」の実態を初めて知り、正解のない中で試行錯誤する先生方の苦労や悩ましさを理解できた。今後は事業所や地域の立場からも、この活動の価値を外部へ積極的に発信・応援していきたい。
- ・子供の進路選択の際、駿河総合高校との交流・共同学習の機会があることを知り、我が子にとって大きな刺激と成長になると期待して南の丘分校への進学を決めた。授業や行事といった特別な枠組みだけでなく、日常の休み時間や廊下などで自然に「友達」として声を掛け合える関係へと発展していったほしいと親としての願いを述べた。
- ・障害の有無を特別視するのではなく、「違いがあること」を前提として共に生活する姿勢が素晴らしい。卒業後の進路や社会生活の追跡データも今後の指標として共有されるとよい。
- ・見学を通じて「両校の職員室が物理的に近いこと」の大きなメリットを感じた。生徒同士の交流を支えるのは教員間の緊密なコミュニケーションであると実感した。
- ・社会そのものが本来インクルーシブであるべき。学校という場で異なる特性を持つ生徒同士が「隣のクラスの友達」くらいの距離感で自然に交ざり合う体験は、社会の多面性を学ぶ上で非常に有意義である。

(5)事務連絡

- ・駿河総合高等学校：第4回学校運営協議会は2月16日(月)午後2時30分から4時30分に開催予定
- ・南の丘分校：第4回学校運営協議会は2月26日(金)午前10時から正午に開催予定

(6)閉会（南の丘 副校長）

- ・今日の協議を通じて、障害に対する「意識の壁」を作っているのは大人側かもしれないと痛感した。
- ・大人の側にある無意識の壁を取り除き、子どもたちが自然に関われる環境を両校の連携によって引き続き整えていくことを誓い、令和8年度第3回合同協議会を閉会した。